

第6回 災害と科学報道…地震災害を中心に

毎日新聞科学環境部

鴨志田公男

◆毎日新聞科学環境部とは

◆私の略歴 大学で地球物理学専攻（地震など）→毎日新聞入社→支局勤務を経て大阪科学部から東京科学環境部へ、科学部生活は13年

【阪神大震災】

- ◆阪神大震災前に活断層に関する記事を何本か書いたが、ほとんど反響はなかった。
- ◆大阪科学部在籍中に大震災に遭遇、直後に淡路島に入り、その後も現場取材を続けた。
- ◆取材結果を連載にまとめた。そんな頃、地下鉄サリン事件が発生、震災報道激減する。

【地震の基礎知識】

- ◆日本は複数のプレートがぶつかる地震の巣。
- ◆地震は主に3種類（プレート境界型、活断層型＝直下型、火山性）
- ◆私たちの身の回りには、活断層が潜んでいる。

【阪神大震災後】

- ◆地震調査推進本部（年間予算100億円）が設置され、観測体制は整備された。
→主要活断層調査と発生確率予測、地震計の設置、地殻変動観測などが進む
- ◆日本の各地が一定期間内にどの程度の揺れに襲われるかの評価もまとまった。
- ◆大震災後も各地で毎年のようにM6～8の地震が発生、人的被害も相次ぐ。
- ◆調査対象になっていない未知の活断層による地震も多い。
- ◆これまで、日本では発生を予知できた地震はない。

【予知はできるか】

- ◆予知のための体制が整備されているのは「東海地震」のみ
- ◆予知の三要素は「発生場所、日時、規模」
- ◆成功の確率は6%（名古屋大・安藤教授）
- ◆予知できたとしても、その情報をどう伝えるかには工夫が必要
- ◆40年間に使った予算は2400億円
- ◆結論：予知は極めて難しい
- ◆日本沈没にも登場した「リアルタイム地震学」

【科学報道の役割】

- ◆地震に関する知識の普及、常に紙面で呼びかけることが大切だと思う。
→「いつ」「どこで」地震被害にあってもおかしくない。個人でも地震の備えを。
→行政は、地震に強いまちづくりを、
- ◆「天災は忘れたころにやってくる」。寺田寅彦と西郷像に学ぶ

以上